

群 教 七	I 01 - 04
	平 25. 251集
	特・特別支援

# 生徒の働く意欲を高める 作業学習の授業づくり

— ICFの視点を取り入れた実態把握を活用して—

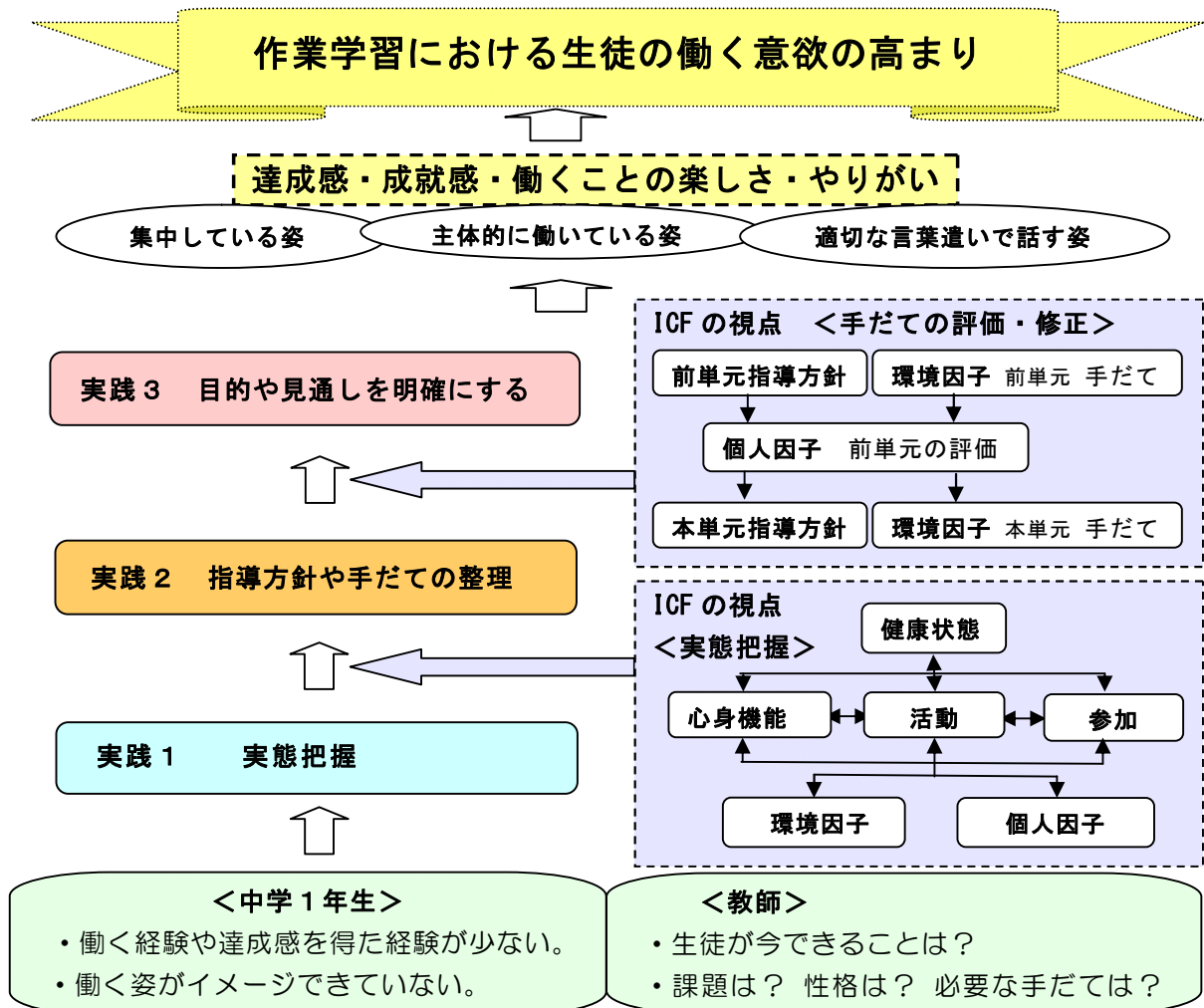
特別研修員 田中 宏美

## I 主題設定の理由

本校中学部の作業班には、手芸班、木工班、缶つぶし班の三班とそれらの班に属する前段階としてのキッズニア班がある。対象となる中学部1年生の生徒9名（担当教諭4名）は、今年度から作業学習に取り組んでいるが、まだ一定の時間をかけて働く経験は少なく、その達成感を得た経験も少ない。また、将来に向けて具体的に働く姿をイメージできている生徒も少ない。本研究では、作業学習に初めて取り組む生徒が、「できた」「頑張った」と達成感や成就感を得ること、また、働くことの楽しさややりがいを味わうことを目指した授業づくりを行うことで、生徒の働く意欲を高めることをねらいとする。そのために、生徒の実態を的確に把握する手段の一つとして、ICF（国際生活機能分類）の視点を取り入れる。その実態把握を活用して、携わる教師間で指導の工夫や環境整備を図るとともに、授業ごとに見直しを行い、次の授業に生かしていく。このように、ICFの視点を取り入れた実態把握や有効な手だての精選は、生徒の働く意欲を高めるためだけでなく、学校生活や将来社会参加する際にも活用することができると考え、本主題を設定した。

## II 研究内容

### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手だて

ICFは、人の生活機能を心身機能、活動、参加の三つの次元でとらえ、それらと健康状態や環境因子、個人因子が互いに影響し合っているという考えである。この視点で生徒の実態を多面的にとらえ、環境因子（手だて・環境調整）を設定し、個人因子（授業での様子）を評価する。また、次の授業に向けて環境因子を修正することで、生徒一人一人にとって有効な支援の見極めや意欲を高める授業づくりにつながると考え、実践を行った。

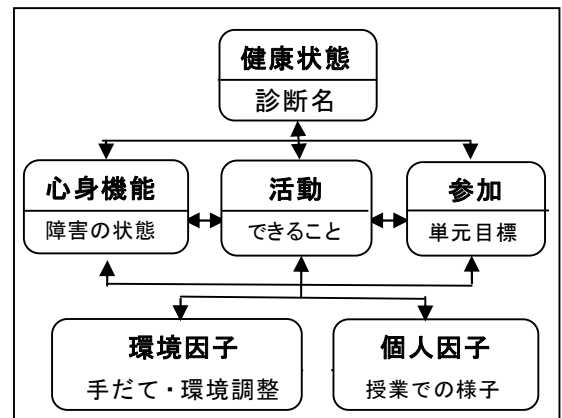


図1 ICFの視点

実践1：（実態把握）「頼まれた仕事をやり遂げよう」

- ① ICFの視点を活用し、それぞれの生徒の特性や課題、手だてを整理し共通理解する

生徒一人一人の作業学習の実態を、図1のようにICFの視点に当てはめ、障害の状態や課題を整理した。携わる教師間で共通理解を図り、実践2に向けて課題設定や環境因子の設定を行った。

実践2：（指導方針や手だての整理）「文化祭で販売しよう」

- ① 少しずつ達成できる目標の設定                      ② 自分でできることを目指した環境設定

実践1での実態把握を受けて、達成目標を少しずつ高める課題設定と、自分でできることを増やす環境因子の設定を行った。技術面の向上に関する成果とともに、集中力や意欲を高める支援がさらに必要という課題が見つかり、実践3に向けて課題や環境因子設定の評価、修正を行った。

実践3：（目的や見通しを明確にする）「もっとよい製品を作ろう」

- ① 購入者のアンケート結果を製品づくりや意欲付けに生かす  
② 見通しをもって取り組むために作業計画書を作る

購入者のアンケート結果を共有し、達成感や成就感が持続できるようにする。また作業計画書を作成し、作業の目的や見通しをはっきりともてるようにして、集中力や意欲を高める支援を行った。

## III 研究のまとめ

### 1 成果

- ICFの視点を取り入れることで生徒一人一人の障害の状態やできること、課題をとらえることができた。また必要な手だてを整え、目的を明確にした授業づくりをすることができた。さらに授業後に手だてを評価し、改善に生かしていくことで、生徒は達成感や成就感を得ることができた。
- 実践3では、生徒たちが作業計画書に従い、完成を目指し集中している姿、目的をもって主体的に働く姿、適切な言葉遣いでやりとりをする姿が見られ、働く意欲を高めることができた。

### 2 課題

それぞれの生徒のもつ課題を早い段階で見極め、有効な手だてや支援を授業に生かせるようにする。そのために、ICFの視点を取り入れた実態把握を繰り返しながら観察眼を養い、多様な支援の方法を準備しておくようにする。

### 3 ICFの視点を取り入れた実態把握を授業に生かしていくために

ICFの視点を取り入れた実態把握から指導方針や手だてを設定し、それぞれの生徒の成果や課題を評価し、次の授業につなげていく授業づくりを生活単元学習などの指導にも生かすことで、多面的な実態把握となり、さらに実態に応じた目標や手だてを立てることができると考える。

#### IV 実践及び改善の実際

##### 実践 2

##### 1 単元名 「文化祭で販売しよう」

##### 2 本単元及び本時について

本単元は、二学期に行われる本校の文化祭での作業製品販売を目指し、準備を行う学習である。一学期に行った作業を少しずつ発展させながら、販売することを目指して制作した。①作業製品を〇段（枚）作るという達成目標を立てて作業に取り組むこと、②包装や値札付け、作製した数や販売した数を把握して販売準備を行うこと、③売上額を計算して、その一部を報酬として得て皆で使い道を相談して使うことなどを通して、販売するまでの仕事の流れ（目標一分担して作業一販売準備一販売一報酬を得る）を体験して理解することをねらいとした。前単元で把握した実態を基に、それぞれの実態や課題に応じて、「少しずつ達成できる目標の設定」や「自分でできることを目指した環境設定」を行い、達成感や成就感を得ることができると考えた。

##### 3 授業の実際

生徒の実態に応じて4グループに分け、それぞれの生徒の特性や課題に応じた作業（コースター製作、敷物製作、かごの模様製作、ビーズアクセサリ製作）に取り組んだ。前単元でとらえたそれぞれの作業学習の実態に応じて単元目標を設定し、必要な手だてを整えた（図2参照）。本単元での授業の様子を評価し、次の授業改善につなげていくようにした。

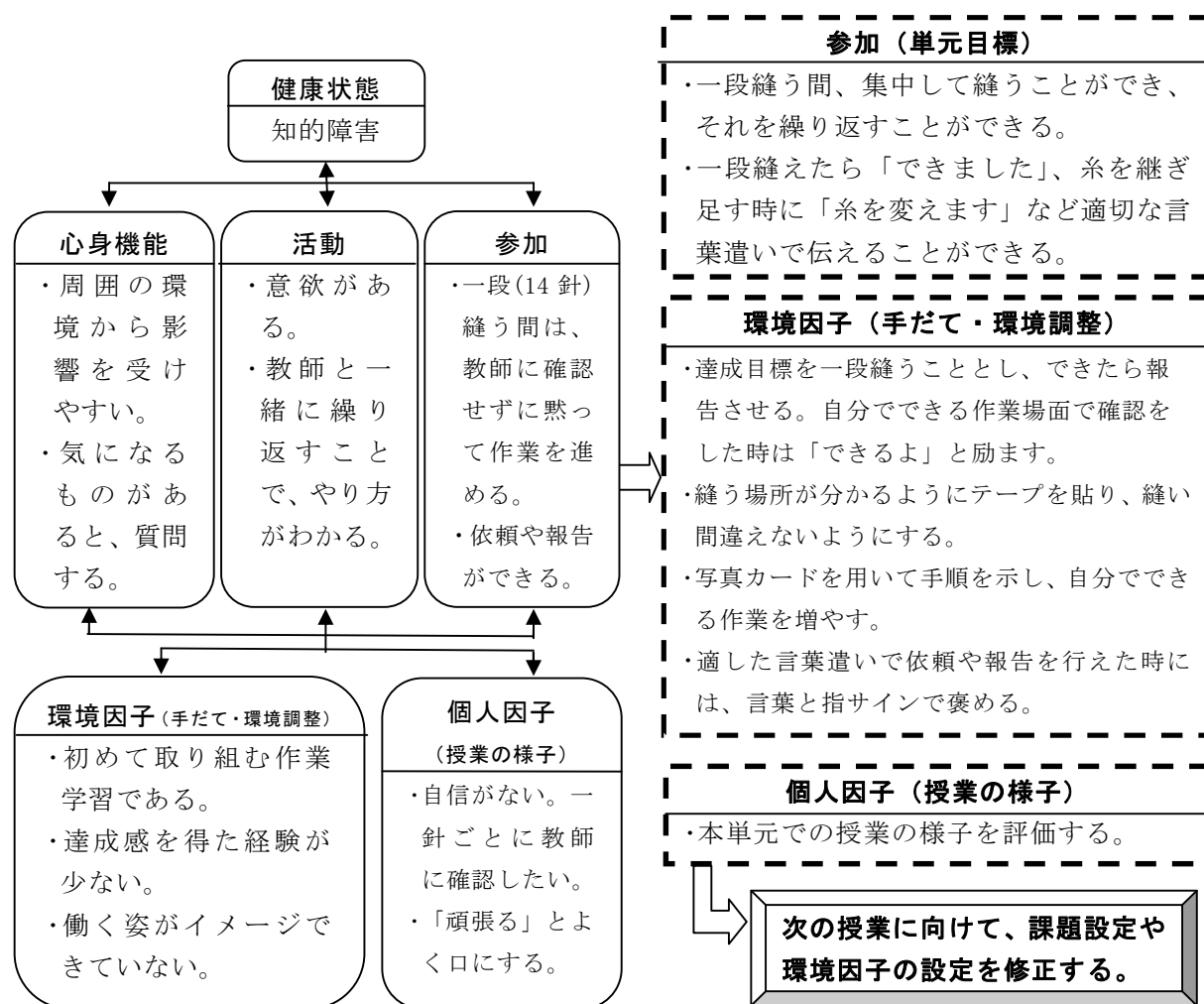
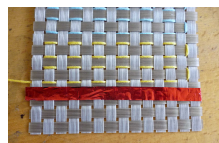
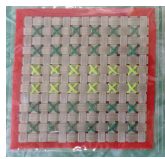
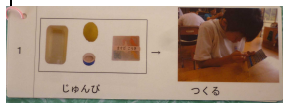
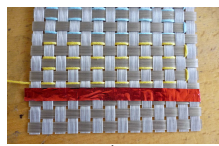



図2 ICFの視点を取り入れた実態把握と手だての整理 (生徒A)

## <授業改善に向けた手だて>

<少しずつ達成できる目標の設定>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>それぞれの生徒の実態に合わせて目標を設定し、達成できたら少しずつ目標の長さを長くしたり、難しい課題にしたりして変更した。</li> </ul>	 
<p>(生徒の様子)</p> <p>生徒A&lt;縫い間違えずに一段直線縫いをして報告することを目標として設定&gt; 一段縫う間、集中して作業を行い、報告できるようになったら、徐々に一段の長さを二倍、三倍と増やしていった。 →もっと大きな製品作りに挑戦させ、集中する時間を長くしていきたい。</p>	
<p>生徒B&lt;クロスステッチに挑戦することを目標として設定&gt; 新しい縫い方に挑戦するという意欲をもち、根気よく縫い進めた。初めは、直線縫い半分とクロスステッチ半分のコースターを、次第に全部クロスステッチのコースターを製作することができた。 →新しい縫い方（V字模様）に挑戦させたい。</p>	

<自分でできることを目指した環境設定>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>それぞれの生徒の課題に応じて必要な手だてを設定し、自分でできることを増やせるようにした。</li> </ul>	  <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">「できました」</p>
<p>(生徒の様子)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>スケジュールの確認</li> </ul> <p>生徒A&lt;めくり式のカードを見ながら、今何をすべきか分かるように設定&gt; →準備の際、机上に道具の配置図を示すなど、さらに支援をする。</p> <p>生徒B・C&lt;机上にスケジュール表を置き、確認できるように設定&gt; →項目ごとにチェック欄を設けるようにする。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>依頼報告の言葉の確認</li> </ul> <p>生徒A&lt;報告するタイミングを写真で提示&gt; →「できました」の報告は、確実にできた。カード無しでも伝えられるようにする。</p> <p>生徒B・C&lt;机上に依頼報告の言葉カードを置き、確認できるように設定&gt; →必要な言葉遣いは理解できたため、カード無しでも伝えられるようにする。</p>	

<文化祭で販売している様子>	
<p>(生徒の様子)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>家族や教師のほか、多くのお客さんに自分たちの製品を買ってもらい、また「大切に使うね」「きれいに縫えているね」と声をかけてもらい、達成感や成就感を得ることができた。</li> <li>一生懸命作った製品を販売し、お金をたくさん得ることができたことが自信となった。</li> </ul>	

## 4 考察

- 前単元でとらえた作業学習の実態に応じて、それぞれの単元目標を設定し必要な手だてを整えることで、自分でできることが増え、自信をもって作業に取り組むことができたと考え。一方で、さらに手だてを増やす必要があるところや少なくするところもあるため、本単元の授業での様子を評価し、次の単元に生かしていくことが大切であると考え。
- 少しずつ達成できる目標を設定し、徐々に目標を高くしたり難しくしたりすることで、生徒の取組はスムーズに移行でき、長い時間集中することや技術を向上させることができたと考え。
- 文化祭での販売を通して、多くの人に自分たちの商品を買ってもらえたことや喜んでもらったことで達成感や成就感を得ることができた。この経験を通して、働く喜びや楽しさを知り、次の作業の目的や意欲につながると考える。

### 実践3

#### 1 単元名 「もっとよい製品を作ろう」

#### 2 本単元及び本時について

前単元「文化祭で販売しよう」で、生徒たちは自分たちが製作したものを多くの人に買ってもらったことに喜びを得た。本単元では、購入者にアンケートを実施し、それらを受けてもっとよい製品作りを目指す単元である。生徒たちは、アンケートから良かった点や使い道、要望を知り、自分たちの作業への達成感を感じたり改善点に気付いたりすることができた。それらを受けて、作業計画書を作り、目的や見通しをはっきりともちながら作業学習に取り組むことができるようにした。

また、前単元の授業を評価し、本単元の単元目標や必要な手だての見直しを行った。

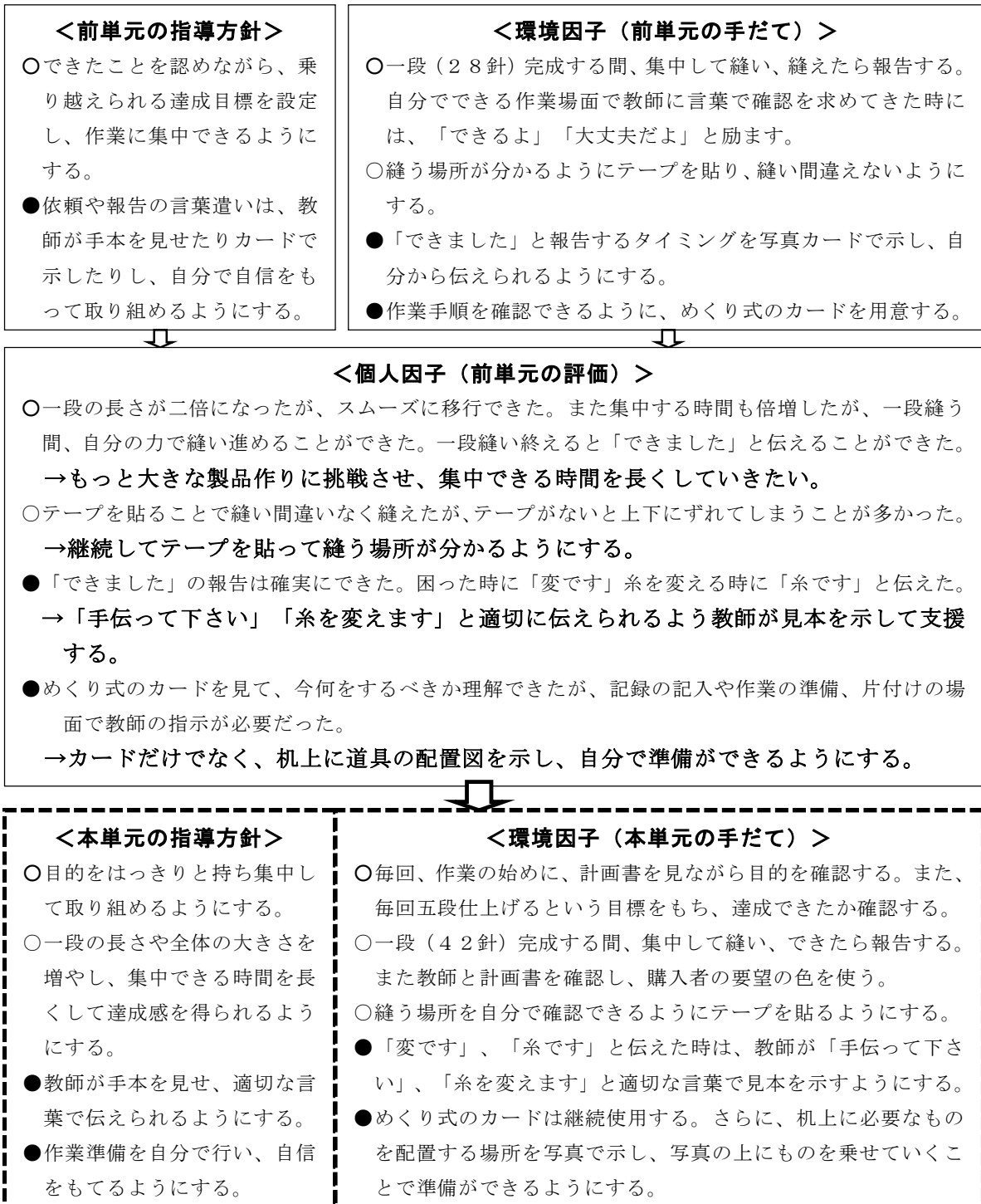


図3 実践2の手だての評価（生徒A） ○…作業にかかわる内容 ●…自立活動にかかわる内容

### 3 授業の実際

#### <授業改善に向けた手だて>

<購入者のアンケート結果を製品作りや意欲付けに生かす>

- ・何を買ってくれたか、どこが気に入ってくれたか、どんな場面で使うかなどを写真やコメントを貼りながら整理した。作業学習時に紹介や掲示し、共有した。
- ・購入した教師が実際に職員室で使っている様子を、見に行った。

(生徒の様子)

- ・製品を買ってもらえたことや使ってもらえたことに気付き、「よかった」「またやりたい」と達成感を感じ、次の作業意欲をもつことができた。
- ・「～(だれ)にもっと喜んでほしい」という気持ちをもつことができた。

→写真や文字にすることで、嬉しい気持ちや満足感、作業意欲を継続できた。

<見通しを持って取り組むために作業計画書を作る>

- ・相手の要望を受けて、だれに、何を、いくつ、何色で作るか、また気を付けることを整理した。
- ・学習の始めに作業計画書を確認し、目的をはっきりとものながら、また見通しをもって作業を進めることができるようにした。

(生徒の様子)

- ・「だれに作る」、「次の糸の色は」、「今日の作業ではだれに何を何個作る」という作業の目的や見通しをもつことができ、集中して、作業を進めることができた。
- ・最終作業時間終了前の五分間に見せた集中力から、「完成させる」という気持ちを強くもっていたことがうかがえた。

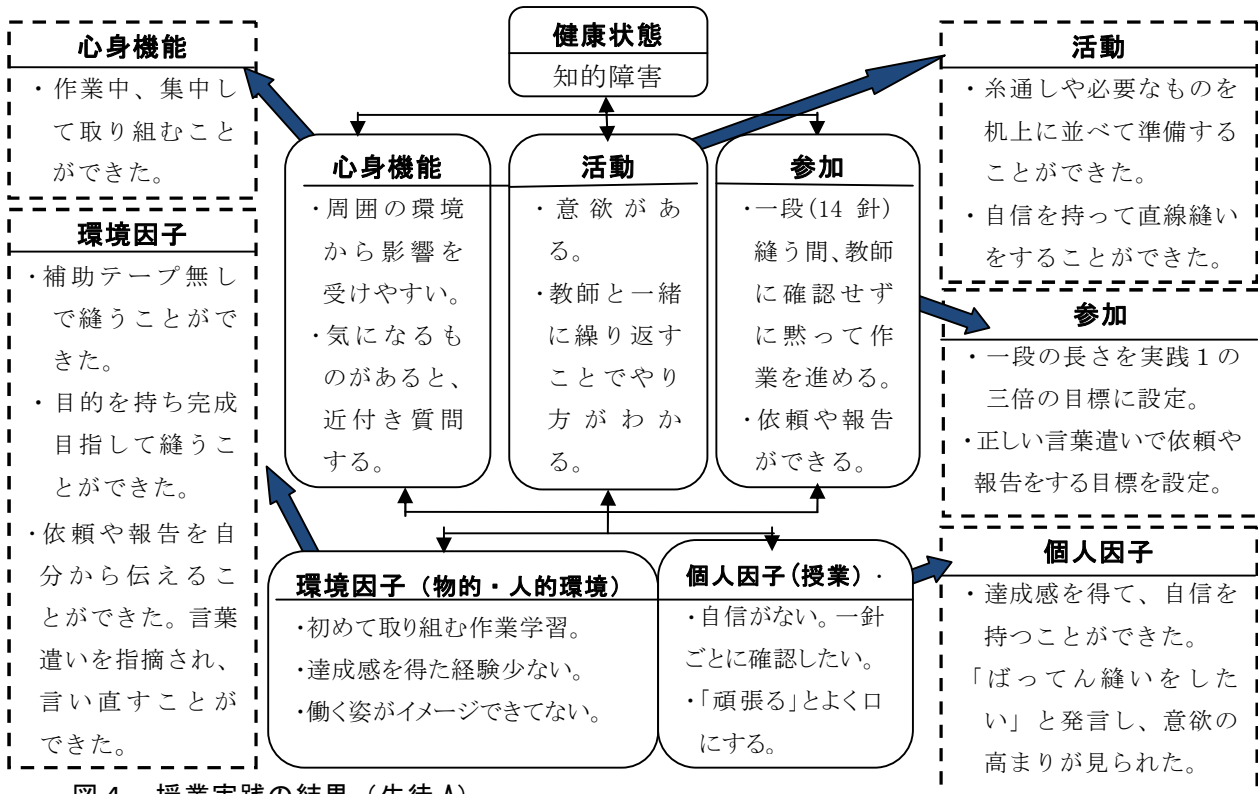


図4 授業実践の結果 (生徒A)

### 4 考察

- 前単元での評価を本単元の指導方針や手だてに生かすことで、有効な手だてを精選することができた。また、購入者へのアンケート結果が次の作業への意欲を高め、計画書を作ることで意欲の高まりが継続し、作業の目的や見通しをもち、集中して作業に取り組むことができたと考える。
- 実践1での生徒の実態と比較すると(図4参照)集中し、完成を目指して、適切な言葉遣いで作業する姿が見られたことから、自信をもち、働くことの楽しさを感じることができたと考える。